

2025 年度

大阪女学院大学
教職課程自己点検・評価

2025 年度教職課程自己点検について

大阪女学院大学・短期大学の教員養成センターでは、2022 年度より教職課程の自己点検を行い、今回で4回目となる。2022 年度に実施した自己点検の形を踏襲し、全私教の示す項目から31 項目について前年度と同様に教員養成センターに所属する教職員7 名(教員6 名、職員1 名)が評価を回答した。2025 年度は2024年度と同様に、さらにその結果についてワーキンググループにおいて改めて全体の評価コメントの見直しを行い、領域ごとに意見交換やまとめを行った。評価は4 段階(4: 充分できている、3: できている、2: 一部できている、1: ほとんどできていない、)で行い、各自の判断が難しい場合は「0: 無回答」としている。それぞれの項目について、本学の状況(できていること)と(課題)を記述式で回答するよう求めた。

2025 年度の自己点検の結果については、項目ごとの平均値とコメントについて公表している。また、それらをまとめる形で領域ごとにサマリーを掲載している。4 回目の自己点検では、グループで改めて話し合うことにより、共通の認識や認識の違いなどを発見し、また共有することができた。2026 年度についてもさらに注意深く取り組みを進める所存である。

教員養成センター長
大塚朝美

2025 年度 教職課程自己点検のまとめ

1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協同的な取り組み

1-1 教職課程教育の目的・目標の共有①～③

【本学の状況（できていること）】

本学では、教職課程の目的・目標および育成を目指す教師像について、教職課程ガイダンスや履修指導を通して学生へ周知するとともに、教職課程担当教員間で共有を図っている。また、GPA や TOEIC 等の基準を設定し、教職課程における学修到達目標の明確化と学修成果の可視化に努めている。学生に対しては、教職科目の履修条件を説明会などで提示して目標を明確化している。

【今後の課題】

今後は、教職課程の目的・目標と各授業科目との関連をより明確に示し、学生が自身の成長や学修成果を主体的に把握できる仕組みを充実させる必要がある。

1-2 教職課程に関する組織的工夫①～⑥

【本学の状況（できていること）】

本学の小規模組織の強みを活かし、研究者教員と実務家教員および事務職員が連携し、定期的な会議の場だけでなく、日常的に情報共有を図っており、協力体制が整っている。また、ICT 環境や施設設備の整備、授業評価アンケートの実施、自己点検・評価活動の継続的な実施などを通して、教育の質保証と改善に取り組んでいる。授業評価アンケートを通して、授業・カリキュラムの工夫を継続的に行い、本学のホームページや年度末に発行している、機関誌で教員養成の状況を広く公表している。

【今後の課題】

今後は、非常勤講師を含めた教職員間の情報共有や連携体制をさらに強化するとともに、教職課程に特化した FD・SD 活動を充実させる必要がある。また、全館 Wi-Fi 環境が整えられているが、Wi-Fi 環境が少々脆弱な教室もあるので、改善を求めたい。

2. 学生の確保・育成・キャリア

2-1 教職を担うべき適切な人材（学生）の確保・育成①～④

【本学の状況（できていること）】

本学では、大学案内、ホームページ、オープンキャンパス等を通して教職課程の特色を積極的に発信している。また、履修要件の設定や履修カルテを活用した継続的な指導により、教職を担うにふさわしい資質・能力を有する学生の育成に努めている。少人数教育の特色を生かしたきめ細かな指

導も行われている。教職課程で学ぼうとする学生は大変意欲が高く、教員としての適性を持ち合わせている。少人数でディベート・ディスカッション・模擬授業等を経験することにより、教員としての資質や能力を育成している。

【今後の課題】

外国ルーツの学生の比率が年々高くなり、日本語指導の必要性や多様な背景を持つ学生への支援体制をさらに充実させる必要がある。また、教職への適性や意欲を多面的に評価しながら育成を行う仕組みの充実が求められる。教職をめざそうという学生は減少しつつある。

2-2 教職へのキャリア支援①～⑤

【本学の状況（できていること）】

本学では、教職勉強会、教育実習報告会、卒業生教員による講演会等を実施し、学生の教職への意欲向上とキャリア形成を支援している。教職勉強会においては外部大学から講師を招き講演会を実施したり、教育実習の報告会を行ったりと、これから実習に行く4年生、3年生に先行予備知識の習得と教職に対するモチベーションを向上させる機会を与えている。教職実践演習において、卒業生の現職教員や学校管理職経験のある教員が講義を行い、学校現場の現状と課題等についても学ぶことができる。また、近隣中学校でのインターンシップ、聴覚支援学校見学、少年補導センター指導員の講演等、外部人材を活用することにより、適切なキャリア支援を行っている。

【今後の課題】

今後は、学生一人ひとりの進路希望や適性に応じた個別支援をさらに充実させるとともに、キャリアサポート部門との連携を強化する必要がある。また、卒業生とのネットワークを活用した継続的なキャリア支援体制の整備が課題である。

3 教職課程カリキュラムの編成・実施

3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施①～⑧

【本学の状況（できていること）】

本学では、教職課程コアカリキュラムに対応した教育課程を編成し、教科専門科目と教職専門科目との連携を図りながら教育を実施している。また、ICTを活用した授業や模擬授業、アクティブ・ラーニングを積極的に取り入れ、実践的な指導力の育成に努めている。教育実習に向けてはGPAやTOEICによる履修条件を設定するとともに、履修カルテを活用しながら継続的な指導を行っている。

【今後の課題】

今後は、ICT や AI をはじめとする教育環境の変化に対応しながら、教職課程の内容を継続的に改善していく必要がある。また、履修条件や学修成果の周知をさらに徹底するとともに、履修カルテを活用した学修成果の把握と評価の充実を図ることが求められる。

3-2 実践的指導力育成と地域との連携①～⑤

【本学の状況（できていること）】

本学では、教育実習、介護等体験、教育インターンシップ、模擬授業等を通して、実践的指導力の育成に取り組んでいる。また、実習校や教育委員会との連携のもと、教育現場における実践的な学びの機会を提供している。少人数教育の特性を生かし、学生一人ひとりに対して丁寧な指導を行うことで、教育現場への理解を深めている。

【今後の課題】

今後は、教育委員会や実習校との連携をさらに強化し、地域の教育課題に対応できる実践的指導力の育成を進める必要がある。また、履修学生数の減少により、模擬授業や協働的な学習活動の実施が難しくなる場面もあるため、実践的な学びを維持・充実させるための工夫が求められる。

評価 4：充分できている 3：できている 2：一部できている 1：ほとんどできていない 0：無回答(わからない)

連番	基準領域1～3	基準項目	➡全私教	全私教 観点	回答数	評価	本学の状況（できている）	本学の状況（課題）
1	1教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協同的な取り組み	1-1 教職課程教育の目的・目標の共有	1-1-①	1-1-①課程教育の目的・目標を、「卒業認定・学位授与の方針」及び「教育課程編成・実施の方針」等を踏まえて設定し、育成を目指す教師像とともに学生に周知している。	7	3.14	目的、目標を「学位授与の方針」及び「教育課程編成方針」等を踏まえて設定し、育成を目指す教師像とともに学生に周知している。	留学生や日本語理解が十分でない学生への周知が課題である。
2	1教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協同的な取り組み	1-1 教職課程教育の目的・目標の共有	1-1-②	1-1-②育成を目指す教師像の実現に向けて、関係教職員が教職課程の目的・目標を共有し、教職課程教育を計画的に実施している。	7	3.43	定期的に教員養成会議を開催し、本学の教職課程教育の目的と目標を共有している。	教職科目を担当する専任教員の間では教職課程の目的・目標を共有し、確認する機会があるが、非常勤の教員と定期的に確認できる機会はない。
3	1教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協同的な取り組み	1-1 教職課程教育の目的・目標の共有	1-1-③	1-1-③ 教職課程教育を通して育もうとする学修成果（ラーニング・アウトカム）が、「卒業認定・学位授与の方針」を踏まえて具体的に示されるなど、可視化を図っている。	7	3.71	教職科目の履修条件は説明会などで提示し、GPAやTOEICの点数などで可視化を図っている。	GPAやTOEICの基準を示しているが、周知が不十分である。常に基準を確認できる方法が必要である。
4	1教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協同的な取り組み	1-2 教職課程に関する組織的工夫	1-2-①	1-2-① 教職課程認定基準を踏まえた教員を配置し、研究者教員と実務家教員及び事務職員との協働体制を構築している。	7	3.86	研究者教員と実務家教員及び事務職員の三者が連携し、定期的な会議の場だけでなく日常的に情報共有を行っており、協力体制が整っている。	入学生並びに事務職員数の減少し、共同体制の再構築が求められる。
5	1教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協同的な取り組み	1-2 教職課程に関する組織的工夫	1-2-②	1-2-② 教職課程の運営に関して全学組織（教職課程センター等）と学部(学科)の教職課程担当者で適切な役割分担を図っている。	7	3.71	小規模組織の強みを活かして、教員養成センターと学部との連携が十分になされている。	小規模な組織であるため適切な連携が図られている。しかし、留学生の履修生が増加したため、より密接な連携が必要である。
6	1教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協同的な取り組み	1-2 教職課程に関する組織的工夫	1-2-③	1-2-③ 教職課程教育を行う上での施設・設備が整備され、ICT教育環境の適切な利用に関しても可能となっている。	7	3.71	全館Wi-Fi環境が整えられ、全学生がタブレット端末を使用して授業を受け、発表なども行っており、ICT環境は整っている。またコンピュータルームも5室あり、1室は自習室として開放している。	動画視聴中にフリーズしたり、反応が遅くなったりするなど、Wi-Fi環境が少々脆弱な教室もあるので、改善を求めている。
7	1教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協同的な取り組み	1-2 教職課程に関する組織的工夫	1-2-④	1-2-④ 教職課程の質的向上のために、授業評価アンケートの活用を始め、FD（授業・カリキュラム改善、教育・学生支援体制の整備等）やSD（教職員の能力開発）の取り組みを展開している。	7	3.29	授業評価アンケートを通して授業・カリキュラムの改善を継続的に展開している。	教職勉強会において外部講師の講演を行ったが、教職課程に特化したFD、SDは定期的に行われていない。

評価 4: 充分できている 3: できている 2: 一部できている 1: ほとんどできていない 0: 無回答(わからない)

連番	基準領域1～3	基準項目	➡全私教	全私教 観点	回答数	評価	本学の状況（できている）	本学の状況（課題）
8	1教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協同的な取り組み	1-2 教職課程に関する組織的工夫	1-2-⑤	1-2-⑤ 教員養成の状況についての情報公表を行っている。	7	3.71	本学のホームページで教職に関する情報を公開しており、内容も定期的に更新されている。また、年度末に発行している機関誌で教員養成の状況を広く公表している。	情報公開の周知をさらに進める必要がある。
9	1教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協同的な取り組み	1-2 教職課程に関する組織的工夫	1-2-⑥	1-2-⑥全学組織（教職課程センター等）と学部（学科）教職課程が連携し、教職課程の在り方により良い改善を図ることを目的とした自己点検評価を行い、教職課程の在り方を見直すことが組織的に機能しているか、この自己点検評価を通じて機能し	7	3.29	自己点検評価を毎年定期的に行って、改善を図っている。	自己点検評価を基にして、改善点を教員養成センターのメンバーで話し合う。
10	2.学生の確保・育成・キャリア	2-1 教職を担うべき適切な人材(学生)の確保・育成	2-1-①	2-1-① 当該教職課程で学ぶにふさわしい学生像を「入学者受入れの方針」等を踏まえて、学生の募集や選考ないしガイダンス等を実施している。	7	3.17	オープンキャンパスやパンフレット、高校訪問などで、教職課程の周知を行っている。	学生の全体数が少ないことに加えて留学生の占める割合が増加傾向にあることから教員志望の学生がより少なくなっている。
11	2.学生の確保・育成・キャリア	2-1 教職を担うべき適切な人材(学生)の確保・育成	2-1-②	2-1-②「教育課程編成・実施の方針」等を踏まえて、教職を担うにふさわしい学生が教職課程の履修を開始・継続するための基準を設定している。	7	3.17	教職課程の説明会や教職勉強会の機会に、教職を担うべき学生像を示している。GPA及びTOEICのスコアにより教職課程の履修に制限をかけている。	外国ルーツの学生比率が年々高まっており、日本語能力の獲得が課題となっていることから、教職を目指す学生数が減ってきている。
12	2.学生の確保・育成・キャリア	2-1 教職を担うべき適切な人材(学生)の確保・育成	2-1-③	2-1-③「卒業認定・学位授与の方針」も踏まえて、当該教職課程に即した適切な規模の履修学生を受け入れている。	6	3.17	履修学生は少ないが、その分模擬授業の回数も多くなり、講義中の発言回数も多くなることから、十分に行き届いた指導ができている。	今年度は短期大学の教職履修学生2年生が1人ということもあり、学生同士の協同やディスカッションが困難な状況となっている。
13	2.学生の確保・育成・キャリア	2-1 教職を担うべき適切な人材(学生)の確保・育成	2-1-④	2-1-④「履修カルテ」を活用する等、学生の適性や資質に応じた教職指導が行われている。	7	2.71	デジタル化した教職履修カルテで教員と学生間のやりとりをしている。学生の適性や資質に応じた教職指導は行われている。	「カルテ」の活用法などの統一した使用用途を作成することを推奨する。
14	2.学生の確保・育成・キャリア	2-2 教職へのキャリア支援	2-2-①	2-2-① 学生の教職に就こうとする意欲や適性を把握している。	7	3.33	学生に模擬授業を行わせることにより、教職の授業において各学生の教職に就こうとする意欲の変化や適性を把握している。	3人のうち1人は民間の企業に就職した。残念ではあるが、教職で学んだ知識や手法を是非企業でも活用してほしいと願う。

評価 4：充分できている 3：できている 2：一部できている 1：ほとんどできていない 0：無回答(わからない)

連番	基準領域1～3	基準項目	➡全私教	全私教 観点	回答数	評価	本学の状況（できている）	本学の状況（課題）
15	2.学生の確保・育成・キャリア	2-2 教職へのキャリア支援	2-2-②	2-2-② 学生のニーズや適性の把握に基づいた適切なキャリア支援を組織的に行っている。	7	3.50	高校に勤務した経験がある教員がキャリア支援を行なっている。また、卒業生の現職教員を招いて講演してもらうことにより、実践的なキャリア支援を行なっている。	進路サポートととの一層の連携が必要。
16	2.学生の確保・育成・キャリア	2-2 教職へのキャリア支援	2-2-③	2-2-③ 教職に就くための各種情報を適切に提供している。	7	3.50	教職勉強会で大学の先生による講演や教育実習生の報告会を行うことによって、教職希望者に対して情報を適切に提供している。	講師登録の方法・登録用紙についてが各教育委員会が変更しており、正確な情報把握が課題。
17	2.学生の確保・育成・キャリア	2-2 教職へのキャリア支援	2-2-④	2-2-④ 教員免許状取得件数 教員就職率を高める工夫をしている。	7	3.17	教職実践演習等の授業で、卒業生の現職教員の講演や元管理職の本学教員の講演を開催し、キャリアに対する意識を高め免許状取得・教員就職率を高めている。	さまざまな対応を行っているが、TOEIC、GPAなどの条件で断念する学生も一定数いる。
18	2.学生の確保・育成・キャリア	2-2 教職へのキャリア支援	2-2-⑤	2-2-⑤ キャリア支援を充実させる観点から、教職に就いている卒業生や地域の多様な人材等との連携を図っている。	7	3.00	地域の小中学校でのインターンシップへの参加を推奨し、意欲向上を図っている。また、少年補導センターの職員の講演、聴覚支援学校見学など、教職についての意識を高めることができた。	一部の授業で卒業生を招いているが、もう少し広く共有できるとよい。
19	3教職課程カリキュラムの編成・実施	3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施	3-1-①	3-1-① 教職課程科目に限らず、キャップ制を踏まえた上で卒業までに修得すべき単位を有効活用して、建学の精神を具現する特色ある教職課程教育を行っている。	7	3.43	教職課程は、英語による専門的な学びを通して国際社会で活躍できる女性の育成を目指すとともに、キリスト教に基づく建学の精神を具現化する教養教育と一体化した教育課程の中に位置づけられている。したがって、教職課程は大学の教育理念と深く結びついており、人間理解を重視する教育の一部として編成されている。	建学の精神と英語科目の関係には一定の共通理解があるが、履修者にもあらためて考えさせるような時間を持てるとよい。

評価 4：充分できている 3：できている 2：一部できている 1：ほとんどできていない 0：無回答(わからない)

連番	基準領域1～3	基準項目	➡全私教	全私教 観点	回答数	評価	本学の状況（できている）	本学の状況（課題）
20	3教職課程カリキュラムの編成・実施	3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施	3-1-②	3-1-② 学科等の目的を踏まえ、教職課程科目相互とそれ以外の学科科目等との系統性の確保を図りながら、コアカリキュラムに対応する教職課程カリキュラムを編成している。	7	3.50	学部の英語教育カリキュラムには、英語教員養成に必修のコンテンツベースによる英語の四技能の修得とコミュニケーション力を育成する科目群が多く配置されている。英語文学、異文化理解科目が教養教育や専門科目に系統的に配置されている。コアカリキュラムに対応している。	どのようにコアカリキュラムに対応するのか、具体的に対応関係を整理・可視化することが今後の課題である。
21	3教職課程カリキュラムの編成・実施	3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施	3-1-③	3-1-③ 教職課程カリキュラムの編成・実施にあたり、教員育成指標を踏まえる等、今日の学校教育に対応する内容上の工夫がなされている。	7	3.57	教員の育成に関する基準や指標は、教職に関する科目群のなかで示されており、学校教育のニーズや課題に応じた内容、時代や教育環境の変化に合わせて教員養成の内容が適切にフォローされている。	学校現場では様々な問題が生起しており、新たな法も制定されている。教職科目間での連携が必要である。「こども性暴力防止法」の施行に伴う対応についても、今後の課題である。
22	3教職課程カリキュラムの編成・実施	3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施	3-1-④	3-1-④ 今日の学校におけるICT機器を活用し、情報活用能力を育てる教育への対応が充分可能となるように、情報機器に関する科目や教科指導法科目等を中心に適切な指導が行われている。	7	3.43	教育の方法やICT活用の理論と実践の授業で修得した知識を応用しながら、英語科教育法や事前及び事後の指導などの授業で、実際にICTを活用した模擬授業を行うなど機会を与えている。	中高の英語の授業にAIを活用している事例が増えているので、AIの活用方法、効果についての勉強会や研究会に参加するなどして、情報を共有するべきである。AIの活用方法についても課題である。
23	3教職課程カリキュラムの編成・実施	3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施	3-1-⑤	3-1-⑤ アクティブ・ラーニング(「主体的・対話的で深い学び」)やグループワークを促す工夫により、課題発見や課題解決等の力量を育成している。	6	4.00	1年次より学校全体で一方通行の講義ではなく、学習者主体のアクティブ・ラーニングの形式を導入した課題発見型、課題解決型の授業を少人数で実施している。	教職課程履修者の減少から、1クラス当たりの人数が少ない場合は工夫が必要である。また、学習者の授業外学習時間を増加させ、授業内で調査した内容を共有する試みが望ましい。

評価 4：充分できている 3：できている 2：一部できている 1：ほとんどできていない 0：無回答(わからない)

連番	基準領域1～3	基準項目	➡全私教	全私教 観点	回答数	評価	本学の状況（できている）	本学の状況（課題）
24	3教職課程カリキュラムの編成・実施	3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施	3-1-⑥	3-1-⑥ 教職課程シラバスにおいて、各科目の学修内容や評価方法等を学生に明確に示している。	7	3.86	Web上での公開に加え、授業初回にはGoogle Classroomを通じて、授業内容や評価方法を明確に示したシラバスを提供している。また、模擬授業を同一基準で評価するループリックを開発し、運用している。	特に模擬授業の評価に関してループリックを作成し、同一基準で評価する方法を模索している。本学では留学生の教職課程履修者が増加しているため、明確な目標を熟知することを希望しているため、シラバスや評価方法の明示的な伝達が不可欠である。
25	3教職課程カリキュラムの編成・実施	3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施	3-1-⑦	3-1-⑦ 教育実習を行う上で必要な履修要件を設定し、教育実習を実りあるものとするよう指導を行っている。	7	3.71	教育実習へ行くための条件を設定（TOEIC550点、GPA3.0）しており、自信をもって実習に臨める体制を整えている。実習前の事前指導で教育実習生としての心構えと態度、SNSに関する指導を行っており、希望者には面談も行なっている。	GPAの基準については周知が必要である。科目等履修生や編入生に対す要件の見直しも課題である。
26	3教職課程カリキュラムの編成・実施	3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施	3-1-⑧	3-1-⑧ 「履修カルテ」等を用いて、学生の学修状況に応じたきめ細かな教職指導を行い、「教職実践演習」の指導にこの蓄積を活かしている。	6	2.14	デジタル化した「履修カルテ」を用いて学生に記録を促している。教職実践演習の授業においても活用している。	教職実践演習の授業にてカルテを使用しているが、学生が卒業後に大学がどのようにカルテを活用していくのかはこれからの課題である。
27	3教職課程カリキュラムの編成・実施	3-2 実践的指導力育成と地域との連携	3-2-①	3-2-① 取得する教員免許状の特性に応じた実践的指導力を育成する機会を設定している。	7	3.71	中学校と高校の免許を取得することから、学校種に合わせた指導を行っている。模擬授業の機会を多く設け、教育実習後には報告会を大学と短期大学の学生が合同で行っている。	中学に実習に行くケースがほとんどのため、やや中学での指導が中心となる傾向にある。
28	3教職課程カリキュラムの編成・実施	3-2 実践的指導力育成と地域との連携	3-2-②	3-2-② 様々な体験活動（介護等体験、ボランティア、インターンシップ等）とその振り返りの機会を設けている。	7	3.57	介護等体験、教育インターンシップの機会を設けている。インターンシップの授業の後には、中学校や小学校の教員を招いて報告会を開いている。	授業科目としてのインターンシップ以外にもいろいろな機会や情報を提供できることが望ましい。また、参加した学生やこれから参加予定の学生同士の交流の機会を設けるなどが今後の課題である。

評価 4：充分できている 3：できている 2：一部できている 1：ほとんどできていない 0：無回答(わからない)

連番	基準領域1～3	基準項目	➡全私教	全私教 観点	回答数	評価	本学の状況（できている）	本学の状況（課題）
29	3教職課程カリキュラムの編成・実施	3-2 実践的指導力育成と地域との連携	3-2-③	3-2-③ 地域の子どもの実態や学校における教育実践の最新の事情について学生が理解する機会を設けている。	7	3.00	教育インターンシップを授業として開講しており、小学校と中学校でインターンシップを行う機会を設けている。	インターンシップに関する情報共有が不足している。また、学生にとってもより参加しやすい機会を提供できると良い。
30	3教職課程カリキュラムの編成・実施	3-2 実践的指導力育成と地域との連携	3-2-④	3-2-④ 大学ないし教職課程センター等と教育委員会等との組織的な連携協力体制の構築を図っている。	7	2.43	一部の市町村教育委員会とは、連携が図られている。	各市町村教育委員会との組織的な連携・協力体制の構築は、引き続き課題となっている。
31	3教職課程カリキュラムの編成・実施	3-2 実践的指導力育成と地域との連携	3-2-⑤	3-2-⑤ 教職課程センター等と教育実習協力校とが教育実習の充実を図るために連携を図っている。	7	3.43	教職員が実習期間に実習校を訪問し、授業見学を行っている。その際に学校長や教頭先生、実習担当教員や指導教員と情報交換などを行っている。	教育実習期間に問題が起こった際の対処については、本学と実習校との連携が重要となるが、実際の連携についてはまだまだ課題が残る。